

たよりの第60号目次

存在の蜻蛉＝明日への祈り

西松 布咏

「薊の会」開催への思い

鶴間 茂登子

「いま、ここ」で、自分じしか表現できないこと

高橋 幸治

三千口の体重

大久保 朋子

唄、そして芝居

鶴間 太郎

《会員コラム》

伊勢 克也

鶴間 茂登子

今後の公演他予定

八月三日(日) 三時より

岐阜・かわらや

第一回 粋艶会 浴衣ざらひ

演奏会および親睦の夕べ

九月廿七日(土) 十二時より

赤坂・泉クラブ

第三十六回 美紗の会のつどい

美紗の会一門演奏会と親睦の夕べ

十月十八日(土) 十六時半より

東京都庭園美術館 大ホール

第五回 にゅあんすの会

存在のかけら＝明日への祈り

十六時半～十八時半 コンサート

十八時半～二十時 パーティ

唄と三味線 西松 布咏

舞踏 大野 慶人

詩・朗唱 白石 かずこ

インド音楽 中村 仁

写真・映像 細江 英公

進行 田口 哲也

十一月二日(土) 十六時～十七時半

前橋・西尾呉服ギャラリー

西松布咏・秋を唄ひ

存在の蜻蛉＝明日への祈り

西松 布咏

冒頭の言葉はこの秋に開催する「第五回になゅあんすの会」のサブタイトルである。

昨年末の「虹の会」の記憶がいまだ消えぬのに、この猛暑のなか私の想いは目下このフリーズが様々な頭の中で行き交っている。人は皆、過ぎし幻影を蜻蛉のように纏い、まだ見ぬ明日へ想いを託しながら生きてゆく存在でありたいと願いながら。

四年前の秋に目白の日立倶楽部での「夢・十九夜物語」を終えた時、一茶の「露の世は露の世ながらさりながら」の句を借りて「限りある儚い世の中だから優しく夢を描いて生きてゆきたいものです」と最後に挨拶をした。そして夢のようだったあの宵を「夢」で終わりにしては想いを寄せて下さったアーティスト達に申し訳ないとの秋に念願のDVDが完成する。

思えば十五年前、共に芸事に打ち込んできた幼馴染の森本純女さんが家庭の事情で日本を離れる際に「貴女の唄で「ゆき」が舞えるようになるまで頑張るから待っていてね」と私に約束をしてニューヨークに飛び立った。そしてこの七月四日に、日本の伝統芸能を異国の方々にお見せしたいと、共に研鑽を重ねて来たお弟子さん達とよつやく念願の故郷に錦を飾るがごとく「第一回純の会」を開催した。猛暑にもかかわらず紀尾井ホールは満員の盛況になり「万歳」でにぎやかに幕を開け最後に純女さんが美しく静謐な「ゆき」を舞った。会を終えた深夜の電話で「母の生前に間に合わなかったけれど、叔母が客

席で嬉しそうな母の姿を確かに視たと云ってくれたわ」と涙ぐんでいた。

芸能は祈りであり訴えであるという。

彼女の一心の舞が魂を呼び、娘の舞姿をなんとしてでも観たいとあの世から母が訪れてくれたのだと思う。日本は古代からかたちなき見えぬものを大切にしてきた「面影の国」であると言われている。この国の伝統芸能は目に見えぬ神に捧げるものだからこそ日々研鑽し、やがては心の中に何かが視えてくるという祈りでなくては……とある時期から思うようになったが、果たして今の世にそういうものかたちは理解されるのだろうか……。

つい最近、チェンマイで布つくりをしている瀧沢久仁子さんからいつものように「アジアの衣展」のはがきが届いた。しかし静かに微笑む写真の横に、――久仁子の眠るチェンマイより、空、風、光を運び届けます――というメッセージの訃報だった。「人が布に託す神秘が時の流れを超越して私に何かを語りかけ、ここに止めさせたのだと思っっています」と霊的な布との出会いを熱く語っていた久仁子さん。一昨年チェンマイを訪れたのに



逢えなかったことが今更ながら悔やまれてならない。今回のにゅあんの会では、彼女が仲立ちして下さったインド音楽奏者の中村仁氏と共演するというのが、

明日の七月二十三日にはまたひとつ歳を重ねる。哀しみは突如としてはるか彼方からも繰り返す波のようには音運れてくる。そんな時、想いを馳せて一心に唄えばやがて年月を経て幻視の色を帯びた唄になるだろうか……。

唄いつづけて行けばやがて明日への祈りが天空に届き、亡き人と語りあえるかもしれない。そんな想いをこめてこの秋、身に余る素晴らしいゲストの方々に導かれて十月十八日の「第五回にゅあんの会」を迎えたいと思う。

「薊の会」開催への思い

鶴間 茂登子

五月二十四日、朝方から薄日が差し込み、「今日は雨」という天気予報もひょっとしたら奇跡が起こったのではと胸を躍らせてはみたものの午後からは予報通りの雨となってしまう。若い頃よりの夢が叶い、今日、実現しようとして



いうのになんと無情な雨だろう。お客様はこの雨の中を何人の方がいらして下さるだろうかと雨空を眺めては心配いたしておりましたが、その心配も束の間、開演時間よりかなり早い時間にお客様が続々と到着いたしました。生憎の雨にも拘わらず、「予定のみなさま全員が遠路よりご出席下さいました。本当にありがとうございました。」

思い起こせば若い頃よりとても好奇心の強い私は芝居に音楽に講演会に「さまさま」な芸術・文化に触れる喜びを満喫いたしておりました。たくさんのお刺戟と出会いが私を育んでくれたように思います。そして、いつしか自分の手で何か企画、開催できる場を持ちたいと夢見るようになっていきました。とはいえ知識も資金も無い全くの素人の私にはとても実現など不可能な夢物語として胸の奥にしまい込んでいたことでした。ところが、縁あって軽井沢の地に居を構えることとなり、昔の夢の実現へ向け一歩を踏み出そうなどと無鉄砲にも決心してしまっただけです。都会にはない自然環境の中だからこそ活かせる空間で、小さくてもみんなで見えながら芸術・文化を楽しむことの出来る場作りを目指そうと思っております。幸いにも多くの方のご協力とご支援のおかげで、音楽、芝居、朗読等の上演企画をする会を開催出来る運びとなりました。会の名前は「薊の会」と名付けました。まだ家も建築されてなく草木だけが茫々と生えていたこの土地で雨に濡れてひときは

鮮やかに咲いていた薊の花。以前よりとても好きな花であったこともあり、薊の花とこの家の絆を大切にしたいと命名いたしました。敷地内には小さなギャラリースペース(多目的空間)もありまして、今後このスペースの有効活用も含めて検討していきたいと思っております。

その第一回「薊の会」唄と語りの夕べを軽井沢の拙宅にて開催いたしました。俳優の寺田農さん、西松布詠師匠の全面的な協力の下、幾度か打ち合わせを重ね、お二人の夢の共演となりました。第一部は松尾芭蕉の「奥の細道」の朗読と解説。寺田農さんは三十代の頃より「奥の細道」の朗読を始められ、「奥の細道」全文朗読のCDも出され、今も全国各地にて朗読の会に出演なさっております。お馴染みの「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり。舟の上には生涯をつかへ、馬の口とらへて老いをむかふるものは、日々旅にして旅を住処とす。古人も多く旅に死せるあり……」。会場内はとても懐かしい響きに包まれていきました。「夏草や兵共が夢の跡」、「五月雨の降り残してや光堂」日本人なら誰もが一度や二度必ず口にしたことのある有名な句が読まれ、続いて布詠師匠の奏でる三味線と唄、「奥の細道」の世界に時折、鳴る響く三味線の音色。いつしか旅人の心境になってしまった



と感じたのは私だけだろうか。そして、次は布詠師匠の新作「新内小唄」に「こりえ」と創作曲「歌行燈」、寺田農さんの朗読による人物描写に乗せて、布詠師匠が紡ぎ出す哀しい恋の世界へとみなさまをぐいぐいと引っ張っていきました。

休憩を挟んで、第二部は、布詠師匠の地唄「ゆき」。はじめに寺田農さんによる谷崎潤一郎の「月と狂言師」より「ゆき」に触れた文章が朗読され、そして、布詠師匠の三味線の撥がひと振り鳴り響くや会場はしんと静まり返り、薄暗い舞台の中、燭台の蝋燭の炎が布詠師匠の顔を静かに映し出し、「花も雪も払えば清き袂かな、ほんに昔の昔のことよ、我が待つ人も吾を待ちけん……」師匠のお腹の奥底から出てくる低く切ない声、何度聞いても心に沁み入ってくる詞、浮世を離れてもなお過去への思いを断ち切れずに苦悩する心、いつしか雪景色の中で佇む女の姿を見ているような錯覚すら感じてしまいました。

会場は静まり返り、みなさまが固唾を呑んで聞き入っていました。やはり布詠師匠の「ゆき」は最高でした。今回、邦楽を初めて聞かれた方が多数いらっしゃいますが、みなさま口々にとても良かった、感動したと言っておられたのがとても嬉しかったです。布詠師匠ありがとうございました。

演奏会の終了後に夏

会を開き、みなさまとの交流の場を持ち、おしゃべりしたり記念写真を撮ったりして楽しい時間を持つことが出来ました。初めての経験で行き届かないことばかりで、反省点が多く残りましたが、みなさまの温かいお気持ちに支えられて何とか会を終えることが出来ました。ありがとうございました。まだ生まれたいばかりのごいさいます。まだ生まれたいばかりの会で試行錯誤の連続ですが、みなさまのお力添えを得て、今後も続けていけたらと願っております。宜しくお願ひ申し上げます。

「いま、ここ」で、自分にしか表現できないこと

高橋 幸治

四月二十九日、西松布詠師匠と門下の諸先輩方と連れだって、国立劇場に花柳千寿文先生の舞踊を観に行った。演目は「傀儡師」。傀儡師とは、首から下げた箱の中にさまざまな人形を入れて諸国を巡り、辻で人々を集めてはその人形を操ってみせる江戸の漂泊芸人のこと。満員となった大ホールの、舞台をすべて見渡せる二階から、傀儡師の衣装に身を包んだ千寿文先生の軽妙かつ洒脱な踊りを堪能させていただいた。そして、やはり、我が師匠の舞台を目の当たりにしているときとまったく同じ印象が胸に去来する。

「普段親しくお話をいただいている千寿文先生とはまったく別の千寿文先生が、いま、ここにいます……」。

昨年三月の入門以来、早一回、美紗の

会に参加させていただいたが、会終了後の宴席では二度とも千寿文先生のお側に座らせていただき、貴重なアドバイスをたくさん頂戴した。こんななありがたいうことは半面、とうにもこうにも恥ずかしくて仕方がない。この恥ずかしさはとりもなおさず、芸の厳しさの中に身を置いておられる先生と、仕事にがっつりけるうちに稽古もできていない自分との対比である。そして我が師匠ばかり、千寿文先生ばかり、舞台上立っておられるときのお二人に私がこてんぱんにやられてしまうのは、その瞬間その瞬間の緊張感と集中力だ。

突然私事で恐縮だが、今年の初めにアスキーという出版社を退社し、二月に「Yes! an」というフリーエッセイ・エー・シーを設立した。まだ正式にスタートして四カ月ほどだが、自分の看板で仕事をするこゝになり、これまでとは気持ちの有り様がだいぶ変わってきた。



た気がする。立場としてはフリーの自分があるプロジェクトと呼ばれるということ、つまり、自分の芸(の)のようなものを期待されているわけで、それが受け入れられようが受け入れられまいが、自分にしか表現できないことを「いま、ここ」で表現しないことには意味がない。「あいつなら面白い企画を出してくれるはず」「あいつなら面白いことを言ってくれるだろう」という周囲の期待を、毎回毎回、絶対に裏切れないというリッシャーがある。

独立以降、自分にしか表現できないこととは何かという独自性の追求と、それを求められたとき、いかに純度の高いオリジナリティーを発揮できるかという一回性の探求を、これまでにはないほど突き詰めて考えるようになった。もちろん我が師匠、千寿文先生には遠く及ばないが、とことなく、自分のこうした気持ちの変化が三味線と唄にも投影されてきたように思う(結果として表れているかどうかはまた別の話ですが)。

「自分の芸をいかに切り切るか……。これまでの人生の中で最も自分という本質に回帰している時期に、西松布詠師匠と出会い、そしてその師匠が尊敬してやまない花柳千寿文先生と出会うことができたのは、まさに偶然を超えた、有り難い縁のような気がする。おしゃべり、お二人と出会うってなかなかあったら、いまの心境もまた違っていたことだろう。仕事で目指す地点と、稽古で目指す地平の急速な接近……。この二つがさらに距離を縮め、完全に重なりあったとき、自分の次のステージ＝舞台が見えてきたような気がする。」

三キロの体重

大久保 朋子

三月、突然の入院で初ざらに出席することができなくなり、師匠をはじめ周りの方々に迷惑をおかけしてしまいました。せっかくお稽古した頃も華勝楼のお料理もフイに……。

昨年秋頃から息切れや動機があったのですが、歳のせい？体重のせい？とあまり気にしていませんでした。今年になって市の検査があり、極度の貧血という結果が！それから貧血の原因探しの検査の数々が始まり、結局病名は大腸ガンでした。それも第Ⅲステージに入っており二週間後には手術ということに。家族はパニックになりましたが、私は取りあえず入院・手術によるブランクで起る問題や雑事を手術前に処理するために、ばたばた毎日動き回り、その勢いのままの入院でした。

入院当日は検査で絶食。翌日は手術前日のため絶食。私は拍当の医師に期待を込めて「相当痩せますよね」と質問した。ところが医師は笑いながら「大腸ガンの手術はあまり痩せないんですよ、痩せても三キロくらいです」と。手術後の苦しい日々、傷口が化膿しているというところから、傷口が化膿しているというところから、再び禁食！結局二週間以上の禁食生活でした。でも、体重は医師の説明通り三キロ減のみやうと禁食が終わわり、体重は着実に増え続け、今や手術前より二キロも太めになってしまいました。「ガンで手術＝激やせ」と思っていた私は、入

院前にワンサイズ小さい服を購入していたのに……。

入院したとき病室の窓の外には白い木蓮の花が咲き、桜の蕾はまだ堅く、花が満開の頃には退院と思っていました。傷口の化膿で入院が長びき、桜の花は散り、桜の芽が吹き始め、やっと退院できたのは、青葉の季節でした。

二ヶ月近くの入院中、多くの人に心配をかけ、多くの友人達の暖かい励ましをいっぱい受けました。そしてこの二ヶ月は、毎日忙しく過ぎていた日々を見つめ直し、これからどう生きるかをめくくり考えさせてもらった時間だったように思います。

唄、そして芝居

鶴間 太郎

早いもので美紗の会に入門して二年になろうとしています。

思えば、「美紗の会」のつどいに出るから観に来たら」と母に誘われたのがきっかけでした。このとき、正直に言いますと、なかなか歌詞を正確に聴き取れず理解できなくて苦々しく聞いていましたが、皆さんともいい声をしていらっしやるなと思ったのを覚えています。

その後、布咏先生の唄を聴く機会などがあり、母から話を聞いたりのちのち、「段々と興味を持ち始め、自分がおそろい会で聴いた皆様のような声で唄えたらカッコいいな」と思い、その当時、和もの習い事をしたいと思っていたのも相まって、先生に「指導頂くことになりました。」

一番初めのお稽古は、すごく緊張したし

ましたが、すごく楽しかったのを覚えています。今まで、歌を歌うのがカラオケくらいだったのと、音痴ということもあり（すごい音痴という訳ではないですが、ある時、音大生に音が半音の半音ずれていますと言われた経験あり）不安でしたが、お稽古をつけて頂くと、自分が唄っていることに感動していました。全然上手くは唄えませんが、家に帰ってから、嬉しくて何度も唄ったのを覚えています。（初めて唄ったのは「からかさ」でした）

習い始めた頃は、間違わずに唄うので一杯でしたが、少し三味線と唄の音に慣れてきたときに、すごく嬉しいことがわかりました。それは、唄と芝居とで種類点があることでした。

先生に洋楽は曲と歌を合わせて（のせて）歌うけど、邦楽は三味線と唄をはずしたり、先に行かせたり、後でついて行ったり、待たたりすることを教わり、とても興味を持ちました。芝居の相手役とのせりふのやりとりも、わざとせりふをはずしたり、間を空けず言ったり、間を空けて答えたり、相手の答えを待たたりするからです。

岸田國士の戯曲で「紙風船」という芝居があります。これは、若い夫婦が結婚後一年の日曜日何もしせずに、家で退屈を持って余っていて、お互いに男と女の意見が合わずに困ってしまう、というお話ですが、このお芝居はそういう台詞のやり取りで話の色付けをします。やはり戯曲というだけあって一つの曲になっているんですね。

それ以外にも、せりふっぽい歌詞を感情、情感を込めて強く出したり、弱く出

したり、濁音を消すように唄ったり、鼻音だったり、とても興味深いです。また、唄自体にある背景や描写もお芝居と同じ面白さを感じております。

お稽古の時間は端唄、小唄の稽古でも、私には芝居の稽古を付けて頂いている感覚です。まだまだ唄の世界は奥が深そうなので、これからもじっくりと鍛錬して行こうと思います。宜しくお願い致します。

《会員コラム》

■二〇〇二年以降制作してきた「家」をテーマにした作品と写真、ドローイングをまとめたアートブック「家家」（六耀社・定価三千円）を出版しました。「家」を単なる建物としてではなく、人の営みを表すものとして、「家を想うこと」、日常のささやかな出来事や人について想うこと、「家」という存在をさまざまな視点でとらえた、淡い水彩によるドローイングを中心に、写真やスケッチ、文章を交えながら、「家」にまつわる十二の物語があり絵本としても楽しめます。青山ブックセンター、紀伊国屋書店他で扱っております。よろしくお願ひします。

（伊勢 克也）

■第二回「薊の会」を九月十三日（土）十三時半より軽井沢の拙宅にて開催いたします。断家の古今亭志ん五さんと俳優の寺田農さんの共演による「落語とおしゃべり」です。詳細はパンフレットにて、ご興味のある方は鶴間（〇八〇〇一一七-四三四五）までお問い合わせください。

（鶴間 茂登）



《編集後記》

本号から《会員コラム》を新設しました。UJには、個展の開催や本の出版などの会員の方々の近況トピックスを掲載する企画でいます。皆様の投稿をお待ちしております。

（Z）

■たよりの第〇〇号

発行者 美紗の会
編集責任者 大久保 朋子
主宰 西松 布咏

稽古場 港区白金台三二二一
白金台プレイス三階
電話 (三四四一) 二七二六
(五四四七) 二四二二

<http://www.17.com.ne.jp/~missab/>